

趙州和尚の生活と意見

——「趙州和尚十二時歌」譯注

衣川賢次

【譯注前言】

趙州從諗和尚（七七八～八九七）は唐代禪の思想をもっともよく體現した禪僧である。『景德傳燈錄』卷一五「趙州觀音院從諗禪師章」の末尾に、編者が評語を加えて次のように言う。

師の玄言は天下に布^しき、時に趙州門風と謂い、皆な悚然^{しやうぜん}として信伏す。

（師の禪僧らしい發言は「趙州の門風」と呼ばれて天下に弘まり、これを聞いた人びとは肅然と襟を正し信服した。）

これは禪僧に対する最高級の讚辭である。趙州和尚の問答の記録『趙州錄』を讀むことを通して、われわれは唐代禪の對話精神にふれ、唐代禪思想表現の精華を知ることができる。

趙州和尚が百二十歳で逝去したのち、弟子の文遠は各種の記録を収集して、五百則あまりの上堂語と問答を集録して『趙州禪師語錄』を編集し、近年にはその他の材料から増補して、六百則あまりを収める新しい編輯のテキスト數種も公表された。

重要なことは、『趙州錄』に収めるこれらの問答のもつ禪の思想をどう讀み取るかであるが、本文を正確仔細に讀解して、唐代禪の思想に對する説得力をもった注解をなした研究は、遺憾ながらほとんどない。現在われわれはコンピュータによるデータ検索を利用して關係する語彙・事項を検出して注を書くことは容易になった。佛教教理學

の術語も各種の大藏經、續藏經から簡単に用例を見出すことができる。目下中國から『趙州錄』の校注と称する數種の出版物はこうして簡單安易に作られたものである。しかし一步進んで、問答そのものが含む問題、つまり問答する禪僧たちがいかなる佛教思想、禪思想を持ち、いかなる具體的課題をめぐって問ひ答え、かれらが一連の問答を通していかなる境界に達したのかについて探究した本はひとつもない。こういったことこそが校注者にとって解決せねばならないもつとも緊要の問題であり、讀者にとつてももつとも關心をもつ問題であるにもかかわらず。

佛教は中國漢代の社會に傳わり、八百年を経過して、唐代に至ると天台宗・華嚴宗などの宗派の教理學者が唯識・中觀等の理論に對して精緻な研究を行なつて佛教教理學を發展させ、その成果は頂點に達した。佛教教理學はほんらい成佛のための理論であり、ひとびとを苦惱から解放するための理論であるが、學者たちの長期にわたる精密な分析・歸納演繹・整合の努力の結果、却つて理論は煩瑣哲學化し、人と成佛を切り離し、人と成佛の距離をますます遠ざけるものとなつた。中唐時代の新興禪宗は、佛教が一種の桎梏と化した局面に興起したのであつた。禪宗は「佛は人に遠からず」、「性は作用に在り」、「色を見て即是ち心を見る」、「隨處に主と作らば、立つ処皆な眞なり」といつた簡明直截な理論を宣言して、當時の戰爭が頻發し、政治が腐敗し、經濟が混亂した社會にあつて、佛教界のみならず廣汎な知識人に強い衝擊を與へた。馬祖道一（七〇九―七八八）が創始した新興禪宗洪州宗は「即心是佛」（わが心こそが佛であるという佛性論）、「性在作用」（佛性は見聞覺知、言語應對のはたらきに發揮される以上、作用を通してこれを識得することと悟りであるという悟道論）、「無事無爲」（理想を外に求めず、平常の心で生活することがありうべき生きかたであるという修道論）という宗旨を掲げたが、のち晩唐五代の時期に到ると、地方の軍閥政權が各自に戒壇を設けて度僧した結果、禪宗内部に一種の大衆化現象（實際には禪僧の質的低下）が起こり、禪宗理論の庸俗的理解が蔓延した。ここにおいて、馬祖禪に對する再檢討ということがこの時期の禪僧たちの主要課題となつた。

したがつて、われわれが晩唐時代の『趙州錄』を讀み注釋を書く際には、『趙州錄』中に交わされる問答の思想史

的背景を理解して、讀者に説明をする必要がある。すなわち禪僧の用いるインド佛教の術語の原義のみならず、問題とされた主題の當時の中國佛教教理學における解釋、さらに當時の禪僧の佛教教理に對する見かたと新解釋等の思想的な説明をおこなうことが必要である。こうしてはじめて『趙州錄』問答の思想内容が明らかになり、問答の十全な理解に達しうるのである。むろんこれは、言うは易く行ない難い努力目標ではあるが。

【趙州和尚十二時歌】

「十二時歌」とは、一日十二時（鶏鳴丑、平旦寅、日出卯、食時辰、禺中巳、日南午、日昃未、晡時申、日入酉、黄昏戌、人定亥、半夜子）の生活を「三韻七韻七七韻、三三韻七韻七七韻」の定型を聯ねて歌う數え歌の「分時定格聯章」と呼ばれる歌辭である。口語で歌われる民間歌謠で、その淵源は南北朝梁代のころに始まり、寶誌（四一八〜五一四）に「十二時」（十二辰歌）の作があつたと言われるが（王昆吾『隋唐五代燕樂雜言歌辭研究』中華書局、一九九六年）、『景德傳燈錄』卷二九に收録する現存「誌公十二時頌」はその内容と押韻から見て中唐以後の偽作である（賈晉華『傳世寶誌禪偈考辨』、『中國禪學』二〇〇四年第三期）。唐代の作品は敦煌發見の寫本（任半塘『敦煌歌辭總編』下冊、上海古籍出版社、一九八七年）のこされておき、内容も通俗道德、詠史、佛教的勸善など多岐にわたり、形式にもヴァリエーションが見られる。禪僧の作品には雲門文偃（八六四〜九九九）の「十二時偈」二套（『祖堂集』卷一一、三韻七韻七七韻／『雲門廣錄』卷下、三韻五韻）および汾陽善昭（九四六〜一〇二三）の「十二時歌」（『汾陽無德禪師語錄』卷下、三韻七韻七七韻、雪竇重顯（九八〇〜一〇五二）の「往復無間十二首」（『祖英集』卷上、『明覺禪師語錄』卷五、三韻七韻七七韻）があり、いづれも禪理を説くものであるが、これらに對して趙州の本歌は一日十二時に即した禪僧の生活（趙州觀音院の生活）を歌うというきわだった特徴をもち、ここから從諗禪師の河北趙州觀音院における生活感情が知られ、『趙州錄』に記録された對話の背景をうかがうことのできる重要な資料である。

唐代の禪院における禪僧の實際の生活を知ることのできる資料は極めて少ない。『景德傳燈錄』卷二六「温州瑞鹿寺本先禪師章」に下記の上堂語がある。瑞鹿本先（九四二—一〇〇八）は五代から宋初にかけての温州永嘉の人、天台徳韶の法嗣。徳韶の示した六祖の「風幡問答」によつて開悟し、作つた三頌「非風幡動仁者心動頌」、「見色便見心頌」、「明自己頌」は投機の偈であつた。瑞鹿寺に住して、「師は爾れより足は城邑を歴ず、手は財貨に度れず、卧具を設けず、繭絲を衣ず、卯齋すること終日、冥坐して申より旦にいたる。徒衆を誨誘すること、朝夕に懇至なり。三十載を踰ゆるも、其の志彌いよ厲はげし」といふ。温州瑞鹿寺の一日の生活を敘して次のように言ふ。

又云：「晨朝起來、洗手面盥漱了、喫茶；喫茶了、佛前禮拜；佛前禮拜了、和尚主事處問訊了、和尚主事處問訊了、僧堂裏行益；僧堂裏行益了、上堂喫粥；上堂喫粥了、歸下處打睡；歸下處打睡了、起來洗手面盥漱；起來洗手面盥漱了、喫茶；喫茶了、東事西事；東事西事了、齋時僧堂裏行益；齋時僧堂裏行益了、上堂喫飯；上堂喫飯了、盥漱；盥漱了、喫茶；喫茶了、東事西事；東事西事了、黃昏唱禮；黃昏唱禮了、僧堂前喝參；僧堂前喝參了、主事處喝參；主事處喝參了、和尚處問訊；和尚處問訊了、初夜唱禮；初夜唱禮了、僧堂前喝珍重；僧堂前喝珍重了、和尚處問訊；和尚處問訊了、禮拜行道、誦經念佛。如此之外、或往莊上、或入郡中、或歸俗家、或到市肆。既有如是等運爲、且作麼生説个勿轉動相底道理？且作麼生説个那伽常在定？無有不定體底道理、還説得麼？若也説得、一任説取。珍重！」

（また言う、「朝起きて手と顔を洗い、口を漱いで、茶堂でお茶を飲む。お茶を飲みおわつて、佛殿で禮拜しおわつて、和尚、主事の所へ行つて挨拶をする。和尚、主事の所へ行つて挨拶をしておわつて、僧堂で朝餉の粥を配る。僧堂で朝餉の粥を配りおわつて、食堂へ行つて粥を食べる。食堂へ行つて粥を食べおわつて、案下處でひと眠りする。案下處でひと眠りしおわつて、起きて手と顔を洗い口を漱ぐ。起きて手と顔を洗い口を漱ぎおわつて、茶堂へ行つてお茶を飲む。お茶を飲

みおわって、あれこれの雑用をする。あれこれの雑用をしておわって、黄昏鐘が鳴ると黄昏偈を唱える。黄昏偈を唱えおわって、僧堂へ行って〈參！〉と報告する。僧堂へ行って〈參！〉と報告しおわって、主事の所へ行って〈參！〉と報告する。主事の所へ行って〈參！〉と報告しおわって、和尚の所へ行って挨拶をする。和尚の所へ行って挨拶をしおわって、初夜偈を唱えおわって、僧堂へ行って〈珍重！〉と言う。僧堂へ行って〈珍重！〉と言っておわって、和尚の所へ行って挨拶をする。和尚の所へ行って挨拶しおわって、佛殿で禮拜し行道しつつ讀經念佛する。これ以外に、寺田へ行って作務をしたり、郡の役所へ行って用事をしたり、信者の家で法事を務めたり、市場商店へ買い物に出かけたりする。こういった種々の行ないがあるが、動轉なき不動の道理をいかに言うか？ 那伽が行住坐臥つねに禪定にあることをいかに言うか？ その禪定にある本體のなきことを、言い留めることができるか？ もし言えるなら、言うがよからう。おんみ珍重されんことを！ 〓

ここにくだくと絞べられたのが、宋初温州の瑞鹿寺という禪院の日常生活である。このように長々と絞べた本先禪師の本意は、行住坐臥、見聞覺知の主體をしかと見よということで、別の上堂語にも以下のように言う。

諸人若也參學，應須眞實參學，始得眞實參學也。行時行時參取，立時立時參取，坐時坐時參取，眠時眠時參取，語時語時參取，默時默時參取，一切作務時一切作務時參取。既向如是等時參，且道參箇甚人？參箇什麼說？到遮裏須自有箇明白處始得。若非明白處，喚作造次參學，則無究了。

（諸君！わたしのところで參學しようと言うなら、眞實の參學でなければならぬ。眞實の參學とは、歩く時には歩く時に參ぜよ、立つ時には立つ時に參ぜよ、坐る時には坐る時に參ぜよ、眠る時には眠る時に參ぜよ、話す時には話す時に參ぜよ、黙する時には黙する時に參ぜよ、すべての作務をする時にはすべての作務をする時に參ぜよ。こういう時に參じたならば、それはどん

な人に參じたのか？どんな言説に參じたのか？ここで自分自身にはつきりとわかっていなくてはならぬ。それがはつきりわかっていないならば、無駄な參學と言うほかに、究極には到達できぬ。

これはのちの「無字の公案」の工夫の一步手前まで来ているように見えるが、ふたつの上堂語からはなお本先禪師のもつ禪のおおらかさがある。これを趙州和尚の「十二時歌」と比べてみると、河北趙州觀音院の貧窮ぶりに對して、温州という土地柄であろう、瑞鹿寺の豊かさは鮮明である。開成五年（八四〇）に日本の求法僧圓仁一行四人が山東登州から河北趙州、鎮州を経て山西の五臺山へ巡禮した時、この地方の情況を記録している。赤山法華院で僧衆に五臺山巡禮のことを告げると、「青州以來の諸處は、近三四年、蝗蟲災有りて、穀稻を喫却す。人は飢貧なるに緣つて、多く賊人有り、簒奪すること少なからず。又た行客は飯を乞うも、人の布施するもの無し。當今四人同行せば、計るに應に太だ難かるべし」と忠告され、また「如し行かんと欲要せば、且らく揚、楚州界に向かわば、彼方は穀熟し、飯食は得易からん」。そこから北上して行つたほうがよいと言っている。事實かれらが趙州寧晉縣東の唐城寺に宿を乞うて泊つた時、「寺は極めて貧疎、僧は心庸賤」であつた。巡禮者のために設置された普通院という無料宿泊所も、「院中曾つて粥飯有らず。近年の蟲災に緣つて、今糧食無し」、「趙州より已來、直ちに此間に至るまで、三四年來、蝗蟲災有りて、五穀熟さず、糧食得難し」（『入唐求法巡禮行記』卷二、開成五年五月廿四、廿五日條）というありさまであつた。趙州和尚は「老僧此間に在ること三十年、未だ曾つて一箇の禪師の此間に到るもの有らず。設い來るもの有るとも、一宿一食して急ぎ走過して、且つ軟暖の處を越い去くなり」（『趙州錄』六二）と言っている。「軟暖の處」とは物資豊かな南方の叢林を指している。

また、この兩所の日常生活に上堂說法の行事にふれないのは不可解で、『景德傳燈錄』の「温州瑞鹿寺本先禪師章」にはいくつもの上堂語を載せ、『趙州錄』にも短いながら上堂語がある。臨濟義玄（？～八六六）の住した鎮州臨濟院

は滹沱河畔の小院で、おそらく常住僧は少なく、『臨濟錄』の示衆は主に五臺山巡禮僧を相手にした説法であった。ゆえに行脚の問題に多く言及しており、趙州和尚の對告衆もおそらく同じであったであろうが、「十二時歌」には上堂示衆にはふれるところがない。

本譯注の「趙州和尚十二時歌」が趙州觀音院の日常生活を俗謠形式で歌っているのは、戲畫化された虚構の創作を装っているけれども、趙州和尚の真情を敍べているであろう。そのことは歌辭の表現のふくらみを讀み取るなかで見えてくるのである。

趙州は「十二時中、如何んが淘汰せん？」の問いに「奈河之水西流急」という「大目乾連冥間救母變文」の詞の一句を唸って答えたことがあり（入矢義高「變文二則」、『増補求道と悅樂』岩波現代文庫、二〇一二年）、本歌もおそらく節をつけて歌われたものであろう。なお、「分時定格聯章」歌辭にはほかに「五更轉」、「十二月歌」、「百歲篇」（任半塘『敦煌辭總編』下冊）があり、荷澤神會（六八四〜七五八）に「荷澤寺神會和尚五更轉」二套がある（唐代語錄研究班『神會の語錄 壇語』附録、禪文化研究所、二〇〇六年）。

『趙州錄』研究資料

一・テクスト

(1) 無著校寫『古尊宿語要・趙州語錄』三卷（柳田聖山編禪學叢書唐代資料編、中文出版社、一九七三年）

花園大學藏寫本の影印（宋版『古尊宿語要』に對する無著道忠の校訂）。附録：無著道忠「鼓山元撰古尊宿語錄校訛」、柳田聖山「古尊宿語錄考」。

(2) 鈴木大拙校閱、秋月龍根校訂國譯『趙州禪師語錄』三卷（春秋社、一九六四年）

一九六一年刊松が岡文庫版の増補改訂普及版（底本は大東急文庫藏『續開古尊宿語要』）。校訂本文五二五則、行

狀、趙王眞讚、哭詩二首、重刻序、國譯（訓讀）、「祖堂集、景德傳燈錄、古尊宿語錄對照表」、索引。

(3) 張子開(勇) 校訂『趙州錄』（中國禪宗典籍叢刊，中州古籍出版社，二〇〇一年）

本文五二〇則（明版嘉興大藏經本を底本、永樂南藏、徑山藏を校本とし、校記を附す）、補遺三九則、附録：傳記、序、贊の校録、法嗣、研究（語録の系譜、傳記）。

(4) 吳言生編『趙州錄校註集評』（二冊，中國社會科學出版社，二〇〇八年）

本文六一五則（五二五則＋補遺九〇則。秋月校本を底本、永樂南藏、徑山藏を校本とす）、校記、箋註（採取以禪證禪的方法）、集評、總評「行狀、傳記、語録序、歷代題詠、歷代詩詠」。

(5) 徐琳校注『趙州錄校注』（中國佛教典籍選刊，中華書局，二〇一七年）

明版嘉興藏三卷本を底本とし、五二二則＋補遺七九則、附録に資料集、趙州公案一九則。

二、資料集

(1) 張勇『趙州從諗研究資料輯注』（俗文化研究叢書，巴蜀書社，二〇〇六年）

圖像、傳記、序贊等、法嗣、與佛教界之交渉、其他有關論述。

三、譯注、論文、評傳、提唱

(1) 秋月龍珉譯注『趙州錄』（禪の語録一一，筑摩書房，一九七二年）

譯注（秋月校本を底本とす）、解説、索引。

(2) 村上俊「趙州の禪風」、「趙州と〈信心銘〉」（『花園大學國際禪學研究所研究報告』第四冊，一九九八年）

村上俊（一九五〇～一九九五）の遺稿。

(3) *Radical Zen The Sayings of Josyu*, Translated with a commentary by Yoel Hoffmann, Autumn Press, Brookline, Massachusetts, 1978.
譯者はイスラエル人學者で、日本滞在中の英譯。秋月譯注を主たる参考書とする。

(4) *The Recorded Sayings of Zen Master Josyu*, Translated and introduced by James Green, Shambhara Publications, Boston, 2001.
譯者はアメリカ人學者で、京都東福寺福島慶道老師のもとで禪僧として修行をした。底本は春秋社版『趙州禪師語録』、簡単な注を附す。福島慶道老師の序を冠する。

(5) 沖本克己『趙州 飄々と禪を生きた達人の鮮かな風光』(唐代の禪僧六, 臨川書店, 二〇〇八年)
著者は花園大學名誉教授。評傳シリーズ「唐代の禪僧」の一冊。

(6) 福島慶道『趙州錄提唱』(春秋社, 二〇一三年)
福島慶道老師(一九三三〜二〇一一)の一九九五年より二〇〇三年にわたる『趙州錄』の提唱から一七則を整理して出版。

(7) 首屆河北〈趙州禪、臨濟禪、生活禪〉學術論壇論文集『趙州禪』(中州古籍出版社, 二〇一一年)
「趙州禪」論文十五篇、「禪學」論文十九篇を収録。

四 索引

(1) ウルス・アツブ編『趙州錄一字索引』(花園大學一字索引シリーズ一〇, 花園大學國際禪學研究所, 一九九六年)
底本は『續藏經』第二一八册所收『古尊宿語録』卷一三、一四。句讀は梁曉虹。

【趙州錄譯注凡例】

一、本『趙州錄』譯注に用いる底本は無著道忠校寫『古尊宿語要』の『趙州語錄』三卷（柳田聖山編『禪學叢書唐代資料編』所收、中文出版社、一九七三年）である。

二、參校本は以下に列する趙州の語を録する典籍である。

『祖堂集』 孫昌武、衣川賢次、西口芳男點校、中國佛教典籍選刊、中華書局、第二次印刷版、二〇一〇年

『景德傳燈錄』 禪文化研究所『基本典籍叢刊』

『傳燈玉英集』 柳田聖山編『禪學叢書唐代資料編』

『南泉語要』 無著道忠校寫『古尊宿語要』（『禪學叢書唐代資料編』）

『汾陽無德禪師語錄』、『虛堂和尚語錄』、『宏智廣錄』、『禪宗無門關』 『大正新脩大藏經』本

『宗門統要集』、『宗門聯燈會要』、『五燈會元』、『佛果擊節錄』、『指月錄』、『石田法薰禪師語錄』、『了堂惟一禪師語錄』、

『禪宗頌古聯珠通集』、『宗門拈古彙集』、『宗鑑法林』、『拈八方珠玉集』、『續藏經』本

『禪門拈頌集』 柳田聖山、椎名宏雄編『禪學典籍叢刊』臨川書店、二〇〇〇年

三、本稿は「趙州和尚十二時歌」十二首の本文、日譯、注釋から成る。二〇一七年の花園大學での課外講座「趙州錄を讀む會」のために作成配布した譯注で、二〇二一年八月に補訂した。拙稿『趙州錄譯注』の冒頭に置くもの。

趙州和尚十二時歌

(一) 鷄鳴丑。

けいのいちゆう
鷄鳴丑

愁見起來還漏逗。

けい見る 起き來れば還って漏逗なるを

裙子褊衫箇也無、袈裟形相些些有。

裙子褊衫くんすへんさんは箇かたうも也また無なく、袈裟けさの形相ぎようそうは些些すこし有り

褌無腰、袴無口、

褌こんは腰こしも無なく、袴こいは口くちくも無なく

頭上青灰三五斗。

頭上せいかいには青灰せいがい三五斗

比望修行利濟人、誰知變作不唧溜！

比もとは望もとむ修行しゆぎやうして人ひとを利濟りきせんと、誰たれか知らん變なじて不唧溜ふしつりゅうと作なるを

【日譯】

鶏の鳴く丑の刻

眼が醒めてわが身を顧みれば、なんとも情けない

上下の著物は一著とて無く

まともなのはわづかに法衣だけ

下穿きは一枚もなければ、ももひき一著もない

頭の上だけは灰塵が三斗も積もっている

昔は修行して人を救済するのだと考えていたのに

ああ、それがこんな愚かなざまになろうとは！

【注釋】

○鶏鳴丑、愁見起來還漏逗 鶏が鳴く丑の刻は午前二時前後で、起床を促す時刻。「漏逗」は疏忽、迂闊から情けない状態になることを表わす疊韻語(去聲候韻)。寝起きからして下述のような情けなく、だらしない状態だ。この「漏逗」のありさまが十二首(つまり一日全體)の内容となつている。「還」は予想に反する結果を表わす副詞。第一首

の押韻は「丑」「有」「逗」候。「口」「斗」厚「溜」宥（流攝尤韻上去聲、候韻去聲通押）。

○裙子褊衫箇也無，袈裟形相些些有 「裙子褊衫」は下著（もすそ）と上著（うわっぱり）。七言句の韻律のため倒装している。「箇」は量詞、「一箇」（一枚）の略。「袈裟」は僧侶の法衣。「些些」はわづかをいう。ここは袈裟だけがややまともな状態、だという意。

○棍無腰，袴無口，頭上青灰三五斗 「棍」は禪の類、「袴」はその上にはくももひき。「腰」、「口」は量詞。「青灰」は灰塵。「青」は黝ずんだ色。「三五斗」は三斗ほどをおおざっぱにいう。唐末の一斗は約0.8リットル（郭正忠三至十四世紀中國の權衡度量，中國社會科學出版社，一九九九年）。むろん「三五斗」は誇張で、頭は塵まみれ。河北地方は乾燥地帯で埃っぽい。

○比望修行利濟人，誰知變作不唧溜 「比」は従前（もともと）を表わす副詞。「修行して人を利濟す」は出家の動機をいう。「不唧溜」は口語で不慧をいい、「俚人の反語」（巷間の洒落言葉）にもとづくと思われる。宋祁『宋景文筆記』（卷上「釋俗」）にいう、「孫炎の反切を作るは、語本と俚俗の常言に出で、尚お數百種あり。故に〈就〉を謂いて〈唧溜〉と爲し、凡そ人の不慧なる者を即ち〈不唧溜〉と曰う。唐の盧仝の詩に〈不唧溜の鈍漢〉と云う」（『全宋筆記』第一編第五冊）。『宗門方語』に「不唧溜、不淨潔、又云不成就」（『禪語辭書類聚』、禪文化研究所、一九九一年）。口語の表記であるから文字は口、魚、水に従うなど一定しない。なお、第一首は『虚堂録』卷七「寶林録」にも引かれ、無著道忠『虚堂録梨耕』に注釋がある。

(二) 平旦寅。

荒村破院實難論。

解齋粥米全無粒，空對閑窓與隙塵。

平旦寅

荒村破院實に論じ難し

解齋の粥米は全て粒無く、空しく對す閑窓と隙塵に

唯雀噪、勿人親、
獨坐時聞落葉頻。

誰道出家憎愛斷、思量不覺淚沾巾。

唯ただ雀すずめの噪なぐのみ、人の親おやしむ勿なし
獨ひとり坐まして時に聞く落葉はらばの頻しばしばりなるを

誰たか道いわん出家は憎愛を斷つと、思量して覺さえず淚きん巾うろおを沾ぬす

【日譯】

日が地平線にある寅の刻

荒れた田舎の村にあるわがぼろ寺は言うに堪えぬ

齋戒を解いて米粒のない粥をすすり

溜め息をついて窓に積もった塵を見る

庭には雀の鳴くさわがしさばかりで、訪ね来る人もいない

ひとりぼつねんと坐せば、落葉の音がしきりに聞こえる

出家は愛憎を斷つなどと言うのはうそっぱち

わが身をふり返るにつけ、涙に暮れる

【注釋】

○平旦寅 太陽が地上に出る前、薄明の時刻。午前四時前後。第二首の押韻は「寅」「親」「塵」「頻」「巾」「眞」「論」
魂（臻攝眞魂韻通押）。

○荒村破院實難論 當時の趙州觀音院の状況を以下に敘べるが、まことに言うに堪えない。「論」はひとつひとつ取りあげて敘べること。第五首（禺中巳）に「端無くも請われて村僧と作なった」その寺がこの「荒村の破院」であった。

○解齋粥米全無粒，空對閑意與隙塵 「解齋」は中食以後食を口にしない齋戒を解いて朝の粥を食すること。「空しく」は以下の動作をしても何の意義もないこと。

○唯雀噪，勿人親，獨坐時間落葉頻 訪ねて来る人もなく、庭は閑散として雀の鳴く聲と落葉の音のみ。

○誰道出家憎愛斷，思量不覺淚沾巾 苾芻（出家比丘）はもと西域の草の名で、その五義の四に「疾病を療ず。出家して能く煩惱の毒害を斷ずるに喩う」という（『祖庭事苑』卷四）。道を求めて出家する者は「當に勤めて懺悔し、先づ愛憎、嫉妬、詭曲、勝上を求むる心を斷つべし」（『圓覺經』）と言われる。しかし出家したからといって煩惱が斷たれるわけではないのだ。ここでは「煩惱を斷ぜずして涅槃に入る、是れを冥坐と爲す」（『維摩經』弟子品舍利弗）、「煩惱を斷ずるを即ち二乗と名づけ、煩惱の生ぜざるを大涅槃と名づく」（『景德傳燈錄』卷四「慧忠國師章」）という高尚な理窟を最初から言おうとするのではない。

（三）日出卯。

日出卯

清淨却翻爲煩惱。

清淨は却翻かえつて煩惱と爲る

有爲功德被塵慢，無限田地未曾掃。

有爲うゐの功德は塵に慢まぜられ、無限の田地は未だ曾かつて掃はかず

攢眉多，稱心少。

眉を攢ひだめること多く、心に稱かなうこと少なし

耐東村黑黃老，

耐がたえがた耐がたきは東村の黑黃老

供利不曾將得來，放驢喫我堂前草。

供利きんりは曾かつて將もち得きた來らず、驢うを放なつて我が堂前の草を喫はわしむ

【日譯】

日の出の卯の刻

清淨は却って煩惱となる

有爲の功德は煩惱に欺かれて無に歸するもの

廣い庭など一度も掃いたことがない

けしからぬことばかり多く、心に喜ばしきことはひとつもない

耐え難きは東村の百姓親爺だ

供物など持つて來たこともないのに

驢馬を連れてきてわが寺の前の草を食わおせる

【注釋】

○日出卯 日の出の卯の刻、午前六時前後。第三首の押韻は「卯」巧「惱」「老」「草」皓「少」小（効攝宵肴豪韻通押）。

○清淨却翻爲煩惱 清淨ということに執著すると、それが却って煩惱となる。それが「清淨」という病である。「却翻」は意外な結果をいう同義複詞の口語。

○有爲功德被塵慢、無限田地未曾掃 努力してわざと爲した功德は、功德を積もうという心が煩惱となって欺かれ無に歸する。だからわたしは掃除して清潔しようなどとはおもわぬ。「塵」は煩惱の喩え。「慢」は原文「慢」を同音形似の「慢」に改めた（『聯燈會要』卷三〇に據る）。「無限田地」は廣い土地。荒れるに任せた觀音院の庭。じつは心（心地、心田）の譬喩で、そこにわざわざ箒を入れて清めようと掃いたことはない。『臨濟錄』にいう「荒草曾て鋤かず」と同義。

○攢眉多、稱心少 「攢眉」は眉に皺をよせること。不快、苦痛の表情。

○耐耐東村黑黃老、供利不曾將得來、放驢喫我堂前草 「耐耐」はけしからん、がまんならんという義の口語で、次

にくる者を罵る。「耐」は「巨」の連類増旁字で「不可」の合字。「東村黒黄老」は東村の百姓おやじ。黒は日焼けと不潔の、黄は老年による黄ばんだ顔色。「供利」は供物。「將得來」は持つて來ることができると意の可能補語の構造。

(四) 食時辰。

煙火徒勞望四鄰。

食時辰
煙火徒勞に四鄰を望む

饅頭餛子前年別、今日思量空嚙津。

饅頭と餛子は前年に別れ、今日思量して空しく津を嚙む

持念少、嗟歎頻、

持念すること少く、嗟歎すること頻りなり

一 百家中無善人。

一 百家中に善人無く

來者祇道覓茶喫、不得茶唾去又噴。

來者は祇だ道う、茶の喫するを覓むと、茶の唾うを得ずんば去りて又た噴る

【日譯】

朝餉の辰の刻

村人の朝餉の煙が上がるのを羨ましく眺める

饅頭と包子には一昨年別れたきり

今日思ひ出して唾を呑んだだけ

「正法」受持の念はもはやなく、歎息することはかり

この村に善男善女は百軒にひとりもおらぬ

來る者はただお茶を飲ませてくれと言うばかり

出してもらえぬと怒って出て行く やれやれ

【注釋】

○食時辰 朝餉の時刻、午前八時前後。舊時は食事は日に二度、朝の仕事を終えて、晚い朝食を攝る。第四首の押韻は、「辰」「鄰」「津」「類」「人」「嘆」「眞(眞韻)。

○饅頭餛飩子前年別 河北趙州は粉食地帯で麵(小麦粉)が主食である。「饅頭」は具を入れぬ蒸しパン、「餛飩子」は具の入った包子。どちらも蒸した熱々をほおぼるご馳走。「前年」は一昨年をいう。高適「河南李少尹の畢員外宅に夜飲するに同ず」詩に「前年は節を持って楚兵を將い、去年は留守して東京に在り、今年に復た二千石を拜し、盛夏五月に西南に行く」、白居易「九日宴集し酔つて郡樓に題す」詩に「前年の九日は餘杭部に、賓を呼んで宴を虚白堂に命じ、去年の九日は東洛に到り、今年の九日は吳郷に來る」。じつは「前年」は「前の年」、「去年」の意味もあっていづれでも通ずるが、「一昨年」の意味は晩出の口語で、高・白二首の詩の口語的な口調は「趙州和尚十二時歌」と共通するところから、この意味に讀む。

○持念少、嗟歎類 「持念」は佛法弘通の念を忘れぬこと。趙州の示衆に、「佛の一字、吾は聞くを喜ばず」と言ふ。僧が問う、「和尚は還た爲人するや？」師云く、「爲人す。」學云く、「如何んが爲人す？」師云く、「玄旨を識らざらんば、徒勞に靜を念す」(卷上、一二六)。「持念すること少し」は韜晦の言のように見えるが、この意味であろう。○一〇家中無善人 觀音院の在所は百軒ほどだったのであろう。「善人」は善行を積んで來世に善處に生まれたいという篤信家の類を指す。

○來者祇道覓茶喫、不得茶唾去又嘔 當時の禪院は喫茶の習慣があり、坐禪や接待に用いられた。茶葉は北方には産せず、南方から運はれて來る貴重品で、農家にとっては贅澤品であつたであらう。

(五) 禺中已。

削髮誰知到如此。

無端被請作村僧，屈辱飢悽受欲死。

胡張三，黑李四，

恭敬不曾生些子。

適來忽爾到門頭，唯道借茶兼借紙。

禺中已くわうちゅうし

削髮さくはつして誰か知らん此かくの如きに到らんとは

端無はしなくも請まねわれて村僧そんそうと作り、屈辱くつじよく飢悽きせい受けて死ほつなんと欲ほつす

胡この張ちやん三さん、黑くろき李り四し

恭く敬きやうは曾かつて些さ子しも生なぜず

適せき來らい忽ふい爾いに門頭かどに到いたつて、唯ただ道だいう茶ちやを借かり兼かねて紙しを借からんと

【日譯】

中天に近い巳の刻

剃髮して僧となり、こんなでいたらくになろうとは！

請われてうっかり村院に住むことになり

屈辱と飢餓の仕打ちを受けて死にそうだ

村の胡族の張三とまっくろけの李四は

僧にへりくだる氣もちは少しもなく

さきほどふいに門を入つて來て

茶葉と紙を貸してくれんかと言う

【注釋】

○禺中已 晝どきに近い巳の刻、午前十時前後。第五首の押韻は、「已」「此」「子」止「死」旨「四」至「紙」紙「支

脂之韻上去通押)。

○無端被請作村僧, 屈辱飢懷受欲死 「無端」は豫期せぬ貌。「飢懷」は飢えのひもじさ、辛さ。

○胡張三, 黑李四 「胡」は胡族の出身。河北地域は胡族の末裔が多く、胡漢雜揉の地であった。「黑」は陽に焼けて黒い百姓の顔。「張三李四」は張家の三男、李家の四男を言い、日本語の「八つぁん、熊さん」の類。

○恭敬不曾生些子 「恭敬」は長上にうやうやしくへりくだること。「些子」は「些些」に同じく、わづかの意。「不曾」は否定を強める。

○適來忽爾到門頭, 唯道借茶兼借紙 「適來」は近い過去をいう副詞。「〜來」は時間詞に附す口語接尾詞。「忽爾」は前ぶれなく。「門頭」の「頭」は名詞に附す口語接尾詞。茶葉と紙を借りに來たとは、農家で何か慶弔の行事があったのであろう。茶葉も紙も、そしてもちろん筆と墨も、普段農家には無いものだった。おそらくついでに代筆も頼まれたにちがいない。厚かましい要求なのではなく、村の僧侶には知識人としてそういう役割があったのである。

(一八) 日南午。

日南午
にちなんご

茶飯輪還無定度。 茶飯は輪還して定度無し
さはん りんかん ていどな

行却南家到北家, 果至北家不推註。 南家に行き却つて北家に到るに、果して北家に至らば推註せず
おわ すいぢゅう

苦沙鹽, 大麥醋, 苦き沙鹽と大麥の醋と
にが さえん

蜀黍米飯蓋蒿苳, 蜀黍の米飯、蓋の蒿苳
しよくしよ べいはん わきよ

唯稱供養不等閑, 和尚道心須堅固。 唯だ稱す 供養は等閑にせざれ、和尚よ、道心は須らく堅固なるべしと
けんご

【日譯】

日が南中する午の刻

二度の飲食は毎日巡って来てきりが無い

托鉢に出て南の家に行つてから、北の家をとまわると

果して北の家では斷われなかつた

出されたものは苦い沙鹽と大麥の酢と

それに高粱の飯、漬物にしたチシャ

施主はくどくどと「供養を粗末になさるなよ、

和尚よ、道心を堅固に持ちなされ」とのたまう

【注釋】

○日南午 太陽が南中する午の刻、午前十二時前後。第六首の押韻は、「午」姥「度」醋「固」暮「註」遇「苜」語（魚虞模韻上去通押）。

○茶飯輪還無定度 「茶飯」は二度の齋粥。「輪還（環）無定度」は車輪のように回り巡って止めどないこと。飯は毎日食わねばならぬということをおおげさに言う。

○行却南家到北家、果至北家不推註 趙州和尚は毎日托鉢に出て、南側の家々をまわつてから、北側の家々をまわつて歩くのが決まったコースであった。南では斷われ、北では布施にあずかつた。「推註（住）」は背を推すことから、推辭（斷わる）、應じない意。

○苦沙鹽、大麥醋、蜀黍米飯薑蒿苜 いろいろな食物を受け取つた。「苦沙鹽」は粗惡な岩鹽。鹽は課税された貴重

品で、非法の私鹽も出まわっていた。「大麥醋」は大麥で作った酢。蓋は漬物、萑菑は野菜のチシャ。

○唯稱供養不等閑，和尚道心須堅固 「等閑」はおざなりにする、いかげんに扱うこと。「和尚」は俗人が僧に呼びかける口頭語。貧しい農民が食べ物を喜捨してくれるときに、いろいろとたいそうな注文をつける。佛教では布施は功德を積む尊い行爲であるとし、施者・受者・施物において執著せず無所住なるを説く（「三輪空寂」という）けれども、施しをする者はこんなものだと皮肉っている。ただし農民の言う「布施を粗末にせず、精進しなされよ」とは尤もな注文ではあると、趙州和尚は苦笑しているのである。

(七) 日昧未。

日昧未
にってつひ

者回不踐光陰地。

者の回は光陰の地を踐まず
この回はこういんのちをふまず

曾聞一飽忘百飢，今日老僧身便是。

曾て聞く一たび飽かば百飢を忘ると、今日老僧の身便ち是れなり
かつひとあひゃつきごんにちすなわこ

不習禪，不論義，

習禪せず論義せず
しゅうぜんろんぎ

鋪箇破席日裏睡。

箇の破席を鋪いて日裏に睡る
いちまいはせきしにちりねむ

想料上方兜率天，也無如此日炙背。

想い料る上方兜率天も、也た此の如く日もて背を炙ること無からん
おもはかじょうほうそつてんまかひもてせをあぶること無からん

【日譯】

太陽が傾く未の刻

このたびはもう托鉢して外を歩かぬ

ひとたび満腹したら百回飢えに苦しんだことを忘れるというが

今日のわが身こそがすなわちそれ

坐禪もせず、論義もせず、

破れ蓆むしろを敷いて縁側に出て晝寢を決め込む

天上兜率天の極樂淨土にも

こんな心地よい日向ぼっこはあるまい

【注釋】

○日昧末 太陽が傾く未の刻、午後二時前後。第七首の押韻は、「未」未「地」至「是」紙「義」「睡」「眞」「背」隊（止攝支脂微韻去聲、蟹攝灰韻上聲通押）。

○者回不踐光陰地 「者回」は今回。「者」は近指の口語代名詞としての用法。「光陰」は明るい光をいう同義複詞。「光陰の地を踐まず」は外へ出かけない意。第六首（日南午）の托鉢で多くの施しを得た、と言うのに續く。

○曾聞一飽忘百飢、今日老僧身便是 「一飽忘百飢」、ひとたびたらふく食べて満腹したら、これまでの数えきれない飢餓の苦しみはすっかり忘れてしまうものだという俗諺。ただし趙州和尚以前の用例は見いだせない。精神的な意味にも用いるが、ここでは原義でいう。「老僧」は自稱。「今日老僧身便是」、今日のわしのここがそれじゃ。腹をポンポン叩いて言っているのが目に見えるようだ。

○不習禪，不論義，鋪箇破蓆日裏睡 わざとらしい「禪定を習する」こともせず、「佛教教理を論ずる」ような野暮なこともしない。「蓆」は敷物。「日裏」は太陽の光の下で。

○想料上方兜率天，也無如此日灸背 「兜率天」は天界の彌勒菩薩が住する淨土。「日灸背」は甲羅干し、日向ぼっこ。宋の釋文珣「灸背」詩に「老身は寒きに能えず、心に唯だ冬日を愛す。灸背す蓬門の下、暖氣は肌骨あまねに洩し。自ら謂う人間の世、此の楽しみ第一に居る」（『潛山集』卷四）と言うから、日向ぼっこは冬の日の老人の楽しみみである。

ただし趙州和尚がこう言うのにも「無事」を貴ぶ馬祖禪の思想的背景がある。懶瓚和尚「樂道歌」に「我は生天を樂わず、亦た福田を愛さず。飢え來らば飯を喫い、睡り來らば臥瞑る。愚人は我を笑うも、智は乃ち賢なるを知る。是れ癡鈍なるにあらず、本體然の如し」(『祖堂集』卷三三、石頭和尚「草庵歌」に「吾れ草庵を結んで寶貝無し、飯めしいおわつて睡ることの快こころよきを圖ほつす」(『景德傳燈錄』卷三〇)。

(八) 晡時申。

也有燒香禮拜人。

五箇老婆三箇瘦、一雙面子黑皺皺。

油麻茶、實是珍、

金剛不用苦張筋。

願我來年蠶麥熟、羅睺羅兒與一文。

晡時申

也た燒香禮拜する人有り

五箇の老婆、三箇は瘦、一雙の面子は黒皺皺たり

油麻茶は實是に珍なり

金剛も苦に筋を張るを用いず

願わくば我も來年蠶麥の熟するとき、羅睺羅兒に一文を與えん

【日譯】

日暮れの申の刻

燒香禮拜の人が來ることもある

五人のおかみさん、三人は瘤もちで

二人の顔はまっくろけの皺だらけ

お供えの油麻茶は まことに貴重品

金剛力士もこれを見たら力瘤を緩めるだろう

來年になつて蠶が繭を結び麥が熟するころには

わたしも羅睺羅兒に一文供えて福を祈つてやりたいものだ

【注釋】

○嘯時申 嘯時申は日暮れの午後四時前後。第八首の押韻は、「申」「人」「珍」「皴」「筋」欣、「文」文（臻攝眞文諄欣韻通押）。

○也有燒香禮拜人 農作業が終わつた夕暮どきになると、時には觀音院へ參拜に訪れる村人もある。

○五箇老婆三箇癯，一雙面子黑皴皴 「老婆」は女性を氣やすい口調でいう呼稱で、おかみさん、おばはんの類。年老いた婆さんとは限らない。「箇」は人を數える口語の量詞。五人連れ立つて來たうちの三人は顔に瘡もち。「癯」は肉瘤。瘰癧るいごまと言ふ病氣。頸部にできやすく、晉の張華『博物志』に「山居の民に癯腫の疾多し。泉の流れざる者を飲むに由る」といふ（卷二、「五方人民」）。また二人は日焼けて黒く皴だらけの農婦であつた。「一雙」はひと組、一對をいふ。

○油麻茶，實是珍，金剛不用苦張筋 「油麻茶」は農婦がお供えに持つて來たお茶。綠茶の葉、胡麻、落花生に鹽をまぜてすりおろし、特製の煎り米を加えたもので、寒冷地の飲料として喜ばれた（法緣「趙州從諗」十二時歌之解析）、『趙州禪研究』中州古籍出版社、二〇一一年。「珍」は珍貴、貴重之意。今生の不遇を歎き、神佛にお供え物をして來世の幸福を祈りに來たのである。「金剛不用苦張筋」の「金剛」は金剛力士。山門の兩脇に立つて、門に入ろうとする魔を却ける。「張筋」は金剛力士の筋肉張つたつかつ體軀。仁王さんも貴重な供物を見て相好をくずすことであらう。

○願我來年蠶麥熟，羅睺羅兒與一文 願わくば來年の蠶が繭を結び、麥が豊作のおりには、老僧も羅睺羅さんに一

文供えて、かみさんがたの福を祈ってやりたいものだ。「羅睺羅兒」は子授け信仰の佛さんであろう。この二句はのち『虚堂録』卷一「顯孝錄」、『法演録』卷中「海會録」等に引かれ、無著道忠『虚堂録犁耕』卷三、『葛藤語箋』に考證がある。「忠曰く、羅睺羅は或いは摩睺羅に作る。俗諺の通名なること知るべし。今（蠶麥熟す）と言ふは則ち是れ七夕の摩睺羅に非ず。蓋し村裏の土偶神も亦た摩睺羅と稱して、蠶麥熟さば則ち錢を將つてこれを祭り、以つて賽願に當つるなるか」。羅睺羅はもと佛陀の長子、のち出家して佛弟子となつた。そこから男の子を授かる信仰の對象「羅睺羅兒」になつたと考えられる。『酉陽雜俎』續集「寺塔記」上の「道政坊寶應寺」條に「王家の舊鐵石及び齊公喪う所の一歳の子のこれを漆すること羅睺羅の如き有り。盆供の日ごとにこれを出す」とあるから、黒い童子の像であつたことがわかる。圓仁は山東登州赤山法華院滞在中に附近の劉村で發掘された佛像群に「羅睺羅一軀」があつたと傳えており（『入唐求法巡禮行記』卷二、開成五年「八四〇」二月十四日條）、五臺山臺懷鎮には唐代創建の羅睺寺があり、羅睺羅像を祭つていた。宋代には七夕にこれを祭る習慣が生まれ、都汴京の各所で「磨喝樂」と稱する彩色泥人形を賣つていた（『東京夢華錄』卷八「七夕」、入矢義高譯注『東京夢華錄宋代の都市と生活』平凡社東洋文庫、一九九六年、伊永文『東京夢華錄箋注』中國古代都城資料選刊、中華書局、二〇〇六年參照）。道忠はそれではないと言ふが、淵源は同じ。

(九) 日入酉。

除却荒涼更何守？

雲水高流定委無、歷寺沙彌鎮常有。

出格言、不到口、

枉續牟尼子孫後、

日入酉

荒涼たるをのぞ除却こすりよういて更に何をか守らん

雲水のこころ高流は定めて無きを委しるも、歴寺れきじの沙彌しゃみは鎮長ちんねに有り

出格しつぱくの言は口くちに到らず

枉なしく續つぐ牟尼むにの子孫この後

一條拄杖麤樹藜、不但登山兼打狗。 一條の拄杖しゆじやうは麤樹そらつの藜れい、但ただ山に登るのみならず兼いぬねて狗を打つ

【日譯】

日の没する酉の刻

寺は荒れ放題、しかしここを守るほかはない

ここへ高流の雲水が訪ねて来ることは決まって無いが

行脚の沙彌ばかりはしよっちゅう来る

かれらの言うことときたら、出格の言葉など絶えて口にせず

空しく佛陀の子孫に任じているのみ

攜えた拄杖はごつごつとした樹の杖

山道を登るほかに犬を打つだけのしろものだ

【注釋】

○日入酉 日没の酉の刻、午後六時前後。第九首の押韻は、「酉」有「守」宥「口」「後」「狗」厚（流攝上聲有厚韻、去聲有韻通押）。

○除却荒涼更何守 「荒涼」は荒廢した貌、觀音院の現状をいう。禪院の規矩を缺いていることをも意味している。日本比叡山の求法僧圓仁は開成五年（八四〇）四月十八日、十九日に五臺山巡禮の途次、趙州を通過しているが、「趙州界寧晉縣東の唐城寺に到つて宿る。寺は極めて貧疏、僧の心は庸賤」、「趙州南の開元寺に到つて宿る。屋舎は破落し、佛像は尊嚴なるも、師僧は心鄙しく、客僧に見あうを怕おそる」と記している（『大唐求法巡禮行記』卷二）。

○雲水高流定委無、歷寺沙彌鎮常有 「高流の雲水」は教學を捨てて禪僧となり、激發開悟の契機を求めて行脚する見識の高い修行僧。「委」は知る意の口語。「歷寺の沙彌」は叢林、禪院をあちこち巡るだけの乞食坊主。「沙彌」は僧形をしているが、いまだ受戒せぬ私度僧を指す。鎮州、趙州は五臺山巡禮の東ルートの起點に位置し、文殊菩薩の靈場への參拜者がここを通過した。當時の節度使は軍費捻出のため金錢を徴して賣度し、また私的な戒壇を置き、「先に錢を納れ、後に度を與え、輪賄して後、法を受けざる者多きに至る」(『大宋僧史略』度僧規利。その實例は『入唐求法巡禮行記』卷二、開成五年(八四〇)四月十三、十四、十五日條に見える)。禪宗内には私度僧も多く、また山間部の禪院が犯罪者の逃竄の場となっていたと言われる(吳洲『中晚唐禪宗地理考釋』、宗教文化出版社、二〇一二年)。

○出格言、不到口、枉續牟尼子孫後 かかる行脚僧どもには高い見識などなく、「衣食の爲に」出家したに過ぎない。臨濟和尚は言う、「大丈夫兒よ！祇麼だ王を論じ賊を論じ、是を論じ非を論じ、色を論じ財を論じ、閑話して日を過ごす莫れ！」(『臨濟錄』示衆四(一))、「諸道流に勸む、衣食の爲にする莫れ。看よ！世界は過ぎ易く、善知識は遇い難きこと、優曇華の時に一現するが如きのみ」(同、示衆一八(一))。また趙州和尚も言う、「老僧は此間に在ること三十餘年、未だ曾って一箇の禪師の此間に到るもの有らず。設い來ること有るも、一宿一食して急ぎ走過し、且つ軟暖の處を趁い去るなり」(六二)。

○一條拄杖麤樹藜、不但登山兼打狗 「拄杖」は行脚僧の道具。『大宋僧史略』卷上「服章の法式」に「禪師は則ち蓆笠及び澡罐、漉囊、錫杖、戒刀、斧子、針筒を持つ。此れ皆な道具たり」というのは行脚の攜帶道具である。拄杖と錫杖(杖先に環がついている)は二物であるが、用途は同じい。山道を登るとき跌倒せぬために、また民家での乞食のときに吠える狗を追いはらうために用いる(『毘奈耶雜事』卷三四)。「麤樹藜」は麤い樹の藜(草本)の意味であらう。「樹」は木の名で、叢生してその幹は堅く、農具や槍の柄になる。「藜」はあかざという植物(草本)

で、枯れて杖になる（藜杖）。ここでは杖の代稱。圓仁は五臺山で多くの頭陀僧、行脚僧に出逢ったことを記録しているが、善住閣院では「禪僧五十餘人有り、盡く是れ毘納錫杖、各おの諸方より來り巡看する者なり」（二八唐求法巡禮行記）卷二、開成五年（八四〇）五月十七日）と記している。ここでは趙州觀音院に行脚して來る沙彌への批判を寓す。

（十）黄昏戌。

黄昏戌こうこんじゆう

獨坐一間空暗室。

獨り坐す一間いっけんの空暗室くうあんしつ

陽燄燈光永不逢，眼前純是金州漆。

陽燄燈光ようえんとうこうは永とわに逢あわず、眼前もつぱは純きんしゅううるしら是しんしゅううるしれ金州の漆

鐘不聞，虚度日。

鐘かねは聞きかず、虚むしく日ひを度わたる

唯聞老鼠鬧啾啾，

唯ただだ聞きく老鼠ろうその鬧さわがしきこと啾啾しゅうしゅうたるを

憑何更得有心情，思量念箇波羅蜜？

何なにに憑よりてか更さらに心しん情じょうの、思しりょう量りょうして箇この波羅蜜はらみつを念ねんすること有あるを得えん

【日譯】

黄昏戌の刻

何もない暗い部屋にひとりぼつねんと坐す

陽の光は消え燈光も絶えてない

眼の前はさながら金州の漆黒

鐘の音も聞こえず、むなしく一日が過ぎようとしている

耳に入るのはただ鼠の騒ぐ音ばかり

ああ、このうえいかにして心を奮立たせ
般若波羅蜜を念ずることができよう

【注釋】

○黄昏戌 たそがれ、人の顔も見分け難い戌の刻、午後八時前後。第十首の押韻は「戌」術「室」「漆」「日」「唧」「蜜」質（入聲術質韻同用）。

○獨坐一間空暗室，陽燄燈光永不逢，眼前純是金州漆 夜になつて燈燭もない真つ暗な室中にひとりぼつねんと坐す。「金州漆」、金州は今の陝西省安康市。「太平寰宇記」卷百四十二「金州」の土産の條に漆を列す。

○鐘不聞，虛度日，唯聞老鼠鬧啾啾 黄昏には昏鐘を撞く。しかし觀音院には撞くべき大鐘もない。鼠の鳴き聲だけが聞こえる。「老鼠」は鼠をいう口語。「啾啾」は鼠の鳴き聲の擬音語（精母）。

○憑何更得有心情，思量念箇波羅蜜 「憑何」は「因何」の義の口語で、ここでは反語。以下のことが不可能なることをいう。「有心情思量念箇波羅蜜」は波羅蜜を念ずる心を起すこと。「波羅蜜」は梵語の音譯。「到彼岸」と譯す。「よく思念して六波羅蜜を修して彼岸に到らん」との心を起す氣もちになれぬ、とは出家の初心を忘れたような自墮落な言い方をしているが、じつは馬祖禪の「無事」の思想を韜晦的に表現するものである。「臨濟錄」示衆四（5）にいう「你ら諸方は言道う、『修有り証有り』と。錯まる莫れ！設い修し得る者有るとも、皆な是れ生死の業なり。你らは言う、『六度万行齊しく修す』と。我は見るに、皆な是れ造業なり。佛を求め法を求むるは即ち是れ造地獄業、菩提を求むるも亦た是れ造業、看経看教も亦た是れ造業なり。佛と祖師は是れ無事の人なり。」

（十一）人定亥。

人定亥。

門前明月誰人愛？

門前の明月誰人か愛でん

向裏唯愁臥去時、
勿箇衣裳著甚蓋？

向裏には唯だ愁う臥去る時、
箇の衣裳も勿きに甚に著りてか蓋わん

劉維那、趙五戒、

劉維那と趙五戒

口頭説善甚奇怪。

口頭に善を説くは甚だ奇怪

任你山僧囊罄空、問著都緣總不會。

任你山僧が囊を罄すとも、問著れて都な總て會せざるに縁る

【日譯】

人の寢靜まる亥の刻

門前に輝く明月を賞づる人はたれもない

中に入っても悲しいことに、横になろうとして

體に掛ける一枚の蒲團さえもない

劉維那と趙五戒が

口先では善行を勧めるのはまったくおかしなこと

わが禪院の貯えが底を盡くのは

飯を食うだけで禪など何も知らぬ者どもを供養しているからなのだ

【注釋】

○人定亥 人が寢靜まる亥の刻、午後十時前後。第十一首の押韻は、「亥」海「愛」代「蓋」會「泰」戒「怪」怪

(蟹攝上聲海韻、去聲代泰怪韻通押)。

○門前明月誰人愛　ここには外に出て月を賞づる風流な人など一人もない。月を眺めてともに語る賞心の友はいないという孤獨。明月（満月）は真如の譬喩でもある。

○向裏唯愁臥去時、勿箇衣裳著甚蓋　「向裏」は部屋。「向」は場所詞につく口語接頭辭。「裏」は中の意。外に出て月を眺めてからわが自室にもどつて。「勿」は無の義の口語。「著甚」は第十首「黄昏戌」の「憑何」と同義。唐の呂岩「沁園春」詞に「限りある到頭の來らば、貧富を論ぜざるに、甚に著りてか干忙しく日夜に憂うる？」（死期が到らば、無情の殺鬼は貧者富者を擇ばぬのに、どうしていつもむやみに恐れて一生を送るのか？）ここでは「一枚の衣裳もないのに、何で體を覆うのか？」「衣裳」は掛け物、ここでは蒲團をいう。

○劉維那、趙五戒、口頭說善甚奇怪　「劉維那、趙五戒」は觀音院の僧衆の二人の名前。「維那」は僧院の衆僧を監督する役職。「五戒」は寺院で雜役に従う行者で、五戒（不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒）を受けただけで、未だ沙彌（十戒受持）に到らぬ者。院内ではみな俗姓で呼んでいた。かれらは檀越に口先では善行を勧める。六祖慧能は言う、「口に善を説き、心不善なるは定慧等しからず。心と口と俱に善にして内外一種ならば、定慧即ち等し」（敦煌本『六祖壇經』）、「善を思わず、惡を思わず、正に任麼なる時、阿那箇か是れ明上坐の本來の面目？」（景德傳燈錄）卷四「蒙山道明章」。百丈懷海は言う、「惡に觸れて惡に住するを衆生覺と名づく。善に觸れて善に住するを聲聞覺と名づく。善惡の二邊に住さず、依住せざるを將て是と爲す者を二乘覺と名づけ、亦た辟支佛覺と名づく。既に善惡の二邊に依住せず、亦た不依住の知解をも作さざるを菩薩覺と名づく。既に依住せず、亦た依住の知解無しとも作さざるを、始めて名づけて佛覺と爲すを得たり」（『百丈廣錄』）。以上は善惡の二邊に執著しない禪の高尚な理窟であるが、「劉維那と趙五戒が口先では善行を勧める」とは、僧に布施をして功德を積めと言っている程度のことであろう。

○任你山僧囊罄空、問著都緣總不會　たといわが懷中がカラになるまで供養してやっても、まったく道理のわから

ない輩はどうしようもない。「任你」の「你」は虚指、讓歩を表わす二音節口語副詞。下句は散文では「都緣問著總不會」。「わが懐がカラになるのは」すべてかれらが禪理を問われてもまったくわからぬからなのだ」「わからぬから、いつまでも供養せざるを得ない」。わが禪院の貯えが底を盡くのは、飯を食うだけで禪など何も知らぬ者を供養しているからなのだ。もしわかつたなら、もうこの觀音院に留まる必要はなく、どこかに住山すればよいのだが。

(十二) 半夜子。

半夜子
はんやし

心境何曾得暫止？

心境何ぞ曾て暫らくも止まるを得ん

思量天下出家人、似我住持能有幾？

思量す天下の出家人、我が住持するに似たるもの能く幾ばくか有る

土榻床、破蘆簾。

土ぼこりの榻床と破れた蘆簾

老榆木枕全無被。

老榆の木枕全く被も無く

尊像不燒安息香、灰裏唯聞牛糞氣。

尊像には安息香も燒かず、灰裏には唯だ牛糞の氣を聞くのみ

【日譯】

真夜中の子の刻

物に觸れて心が動くのはいつまでも止むことがない

つらつら思うに、天下の出家人のなかで

わたしのような住持は他にあるうか

土ぼこりの寢臺に、破れた蘆の敷き物

古びた榆の木枕だけで掛け蒲團もない
本尊さまに焚く安息香もなく
香爐には牛糞のにおいがするだけ

【注釋】

○半夜子 真夜中の夜半、子の刻、午前零時前後。第十二首の押韻は、「子」「止」「止」「幾」尾「簾」「廢」「被」「紙」「氣」未（止攝上聲止尾紙未韻、蟹攝去聲廢韻通押）。

○心境何曾得暫止 心は對境に緣じて思いを生ずる。心意識の作用は暫時も止むことがない。

○思量天下出家人, 似我住持能有幾 こんな觀音院の慘めな住持のごときは他にあるまい。

○土榻床, 破蘆簾, 老榆木枕全無被 「榻床」はベッド、「蘆簾」は榻床に敷く蘆で編んだ席（敷き物）。榆はこれの木。華北に産する高木で、皮を剥ぐと堅く滑利なので器に適し、また莢仁で糜羹を作ると熟睡できるといふ（『本草綱目』卷三五木部）。生長が速く、器物、車轂の材となる有用な木なのでさかんに栽培された（『齊民要術』卷五「種榆白楊」）。

○尊像不燒安息香, 灰裏唯聞牛糞氣 「安息香」は段成式『酉陽雜俎』前集卷十八「木篇」に、「安息香樹は波斯國に出づ。波斯には呼んで辟邪と爲す。樹長は三丈、皮色は黃黑、葉は四角なる有りて、寒を経るも凋まず。二月に開花し、黄色にして花心は微かに碧、結實せず。其の樹皮を刻むに、其の膠なること飴の如し。安息香と名づく。六七月に堅く凝るとき、乃ちこれを取る。これを焼けば神明に通じ、衆惡を辟く。」すなわち「安息香」は南蠻渡來の高級香であるから、ここにあるはずもなく、「香爐の中からひどい牛糞のにおいがする」とは趙州和尚の諧謔であろう。

